

あと一色で虹色になる

みずたま研究所

枝の先

岩山にいた。私はサンダル履きである。岩肌が見た目よりもなめらかでするすると足元が浚われてしまう。

抜けるような晴天。黄色い陽が刺さる。現世は遠く、星と同じくらいの距離があるような気がして優しくなれた。

身体が在る、という実感がどうしたら生まれるのか自分にはわからない。対象物があって、その距離ならわかる。そもそも身体とは何か。自分という存在と一体になっているものなのか。それなら自分という存在がいやに野蛮で、血生臭いものに感じられてぞっとする。もし私の「身体」に黄色い陽が刺さるならそれはもっと罪作りの所作であるが、私に黄色い陽が刺さるのはもっと本当のことで、お互いに抵抗感のないもの、私は透き通っていてその中を陽が抜けていった、その残滓を嗜んでいる――そんなのが私の「実感」といえるものである。

私にとっては岩山もコンクリートの歩道も同じものを感じられる。これはおそらく「力が要る」「疲れる」という感覚が一切知覚できないためで、私はただただ移り変わる視界から色を切り取っていく。都会なら信号機の赤に照らし返す硝子窓、田舎のトタンは色気を醸すし、こんな岩山ならばその岩肌と、晴天に伸びる枝の先。おまえの思慕はどこへ向かうのかと尋ねれば、どこからかはらりと小鳥が降りる。寂しげな赤蜻蛉、羽根が黄色を乱反射している。おまえの羽根は何色か？お日様色にはまだ足りぬ――

岩山を下り、もう見えぬ頂へ合掌して帰路に着く。